

機関番号	研究種目番号	応募区分番号	小区分	整理番号
17102	05	1	02060	0001

平成31年度(2019年度)基盤研究(B)(一般)研究計画調書

平成30年10月16日
2版

新規

研究種目	基盤研究(B)	応募区分	一般
小区分	言語学関連		
研究代表者 氏名	(フリガナ)	シモジ ミチノリ	
	(漢字等)	下地 理則	
所属研究機関	九州大学		
部 局	人文科学研究院		
職	准教授		
研究課題名	日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究		
研究経費 (千円未満の 端数は切り 捨てる)	年度	研究経費 (千円)	使用内訳(千円)
			設備備品費 消耗品費 旅費 人件費・謝金 その他
	平成31年度	3,690	0 290 3,400 0 0
	平成32年度	3,500	0 100 3,400 0 0
	平成33年度	3,500	0 100 3,400 0 0
	平成34年度	2,500	0 100 2,400 0 0
	平成35年度	0	0 0 0 0 0
総計	13,190	0 590 12,600 0 0	
開示希望の有無	審査結果の開示を希望する		
研究計画最終年度前年度応募	--		

1 研究目的、研究方法など

本研究計画調書は「小区分」の審査区分で審査されます。記述に当たっては、「科学研究費助成事業における審査及び評価に関する規程」（公募要領109頁参照）を参考にすること。

本欄には、本研究の目的と方法などについて、4頁以内で記述すること。

冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述し、本文には、(1)本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」、(2)本研究の目的および学術的独自性と創造性、(3)本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか、について具体的かつ明確に記述すること。

本研究を研究分担者とともに行う場合は、研究代表者、研究分担者の具体的な役割を記述すること。

（概要）

本研究の目的は、琉球諸語および本土諸方言（以下、日琉諸語）を対象に、言語類型論で大きな注目を集めつつある有標主格(marked nominative; Dixon 1994)という格配列パターンに着目して、その共時的バリエーションの実態を記述する基礎的な研究を行うことである。格配列(case alignment)とは、自動詞主語(S)、他動詞主語(A)、目的語(P)のうち、どれとどれを同じように格標示するか(すなわち「揃える(=alignする)」か)を問題にする概念である。格配列という見地から類型化を行うと、ASを同一に扱い、Pを別扱いする対格型(AS/P)、SPを同一に扱い、Aを別扱いにする能格型(A/SP)、3つを全て同じにする中立型(ASP)、全て異なる標示にする三立型(A/S/P)、Sの格標示が「A的なS」(動作主S, S_A)と「P的なS」(被動者S, S_P)に分裂する活格型(AS_A/SP)などが主要な格配列パターンとされる。

有標主格は対格型的一种である。通言語的にみて一般的な対格型は、ASを無標にして、Pを格標示する格標示パターン(有標対格)であるが、有標主格はASに有標の格標示を行い、Pを無標(格標示なし)とする。このタイプは琉球諸語に極めて広範に見られる。以下は与那国語の例である。(1)の他動詞文で、目的語は常に無助詞である一方、(1)(2)に見るように主語*khari*は常に主格助詞*nga*で標示される。

(1) 他動詞文：*khari nga* (彼が) *anbidungu* (おもちゃ) *dandasjan.* (壊した)

(2) 自動詞文：*kharii nga* (彼が) *khagurun.* (隠れた)

本土方言でも、西日本(近畿から九州)の多くの方言は、対格標示をほとんど行わないか、行うとしても特殊な要因(目的語が動詞に隣接しないなど)に限定される一方で、主格標示が徹底される(Shimoji 2018a)。類型論的に見た時の有標主格の本質は、対格型であるのに対格標示よりも主格標示が目立つ、という、標示の逆転現象である。この意味で、西日本方言も、有標主格に類するタイプ、あるいは有標主格に、ごくわずかな有標対格の性質が合わさったものと考えられる(Shimoji 2018a)。もちろん、与那国語のように、そもそも対格標示のすべを持たない言語と、西日本方言のように、ヲヤバ(後者は九州方言)、目的語末音素の長音化(例：広島方言)など、対格標示が存在するが、主格標示に比べて明らかに生じにくい言語を、一括りにすることには慎重にならねばならない。これらを同一のタイプにするのか、あるいは有標主格と有標対格の連続体を想定し、そこへの位置付けを考えるべきなのかは、本研究で議論する。以下ではひとまず、両者を合わせて有標主格と呼ぶことにする。

有標主格は世界的にはきわめて稀であり、1.1節で述べるように理論的には存在自体が「想定外」とされる(Handschuh 2014)。この「想定外」を検証する研究が近年盛んになってきているが、有標主格がかなり広範に見られる琉球諸語や西日本方言は、これらの類型論で一切議論されることがなかった。本研究は、世界で初めて、有標主格の類型論に、日琉語族の貴重なデータを提供するとともに、有標主格を想定外とする現在の理論モデル自体を問い直すきっかけを作る基礎研究として位置付けることができる。(引用文献は1.3節末尾参照)

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

(本文)

1.1. 本研究の背景と本研究の学術的な「問い」

近年、日琉諸語の方言記述、とりわけ統語分野の記述は大きく進展しつつあり、その成果は例えば対格型以外の多様なパターン(活格型について坂井2013, 中立型についてAso 2015)の発見に見られる。この最近の研究動向は、日琉諸語の各方言が標準語研究のバイアスを脱し、あるべき形で記述されはじめたことを示す。ただし、これらの成果が、類型論的な「驚き」をもって迎えられたということではない。活格型も中立型も、世界的には比較的よく知られた格配列パターンである。

これに対し、本研究で扱う有標主格はまさに類型論的な驚きとされているものである。有標主格は、類型論では例外扱いされるほど僅少であると考えられている(Dixon 1994, Handschuh 2014)。Comrie (1994)や佐々木(2008)も、この例外的側面を強調して、琉球諸語における有標主格の存在に注視する。有標主格を例外的と見る理論的前提は以下の通りである。

格標示の機能をASPの相互識別に求める標準的な見方(以下、相互識別仮説)によれば、どのような格組織においても、(相互識別不要な)唯一項としてのSに対する格標示は不要であると予測される。この予測は、Greenberg (1963)が指摘するUniversal 38(「もしASPの中で格標示の欠如(無標)が見つかるとしたら、その中には必ずSが含まれる」)としても知られる。相互識別仮説に対する例外が、S(とA)を有標とするのにPを無標とする有標主格である。確かに、世界最大の類型論データベースであるWorld Atlas of Language Structures (WALS)によると、有標主格は対格型の52言語中6言語にすぎない(Shimoji 2018a)。よって、言語類型論の研究者たちは、相互識別仮説は有効で、普遍性を持つと考えている。

有標主格の言語は希少であるから、現時点で一番必要な研究は、有標主格とみられる個別言語の実証データの詳細な報告と多角的な分析である。これまでのところ、有標主格はアフリカ、パプアニューギニア、北米西海岸に集中していることがわかっている(König 2006, Handschuh 2014)。しかし、上記の欧米主導の類型論的研究において、有標主格が日琉諸語にも見られ、かつ琉球諸語では最も広範に見られるタイプであるという事実は全く把握されていない。一方、国内の記述研究でも、申請者を中心とする琉球諸語の研究を除き、有標主格はそもそも問題にされることがなく、具体的にどの方言に分布するかという基礎的な記述データに乏しい。上記を踏まえ、本研究では以下の3つの問いを設定する。

- (3) 日琉諸語において、有標主格はどこからどこまで分布しているのか?
- (4) 有標主格の共時的存立基盤は何か?(すなわち、どのような意味機能があるのか?)
- (5) 言語類型論で明らかになっている他言語の有標主格との共通点・相違点は?

1.2. 本研究の独自性と創造性

本研究の独自性は以下の2つである。

[1] 相互識別仮説に立脚しない

本研究の最大の特徴は、A, S, Pへの格標示の動機はAとPを互いに区別するためであるとする相互識別仮説に立脚しない点である。上述の通り、相互識別仮説こそ、Sにあえて格標示する有標主格を例外的とみなす根拠になっている。相互識別仮説から離れて有標主格の基盤を探ることは、日琉諸語に有標主格が広範に見られるという言語事実を出発点とした発想であり、理論先行で有標主格の「異常性」を強調するこれまでの研究との大きな違いである。

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

[2] 情報構造の観点から有標主格の存立基盤を探る

本研究では、日琉諸語における主語(AとS)には、Pとの区別と無関係に格標示されなければならない動機があると考えられる。この新しい考え方に基づき、本研究で吟味・検証する有力な仮説の1つとして現時点で具体的に提示できるものは、A/Sの格標示が、情報構造的な(すなわち焦点や主題などの「とりたて」の)要因で促されるとの仮説である。申請者は、Shimoji (2018a, b)において、ある方言に有標主格が見られる場合、必ず名詞句階層上位(とりわけ代名詞)および動作主性階層上位(A, 動作主S)に分布するという記述的事実を発見・報告した。例えば与那国語では、表1に見るように代名詞に関してはA/Sが常にngaで標示され、Pは常に無助詞となる有標主格パターンをとるが、語彙名詞に関してはAだけが常にngaで標示され、Sは動作主かどうかでngaの取り方が変わる活格パターンをとる。

表1. 与那国語の格配列

	代名詞	語彙名詞
A	nga	nga
S _A (動作主S)		
S _P (被動物S)		∅
P	∅	
格配列パターン	有標主格	活格

表2. 脱主題化仮説による主格分布の予測

	名詞句階層上位	下位
A	主格助詞	
S _A (動作主S)		
S _P (被動物S)		
P		

有標主格が見られるのは、主格標示が生じるという意味において当然、主語が主題ではない環境である。例えば、中立叙述環境がその典型である。申請者は、日琉諸語の主格を(単に主語を標示するだけでなく)「主題ではないこと」を示す脱主題標識であると見る。これを申請者は脱主題化仮説と呼ぶ(下地印刷中)。名詞句階層上位・動作主性階層上位の名詞句(代名詞、動作主すなわちAとS_A)は、談話で主題として働く可能性が高い名詞句であって、これらが主題ではない環境で生じる場合、つまり内在的に期待される役割に反する場合、主格標示される必要性が高まると考えるのである。結局、主語に対する格標示の必要性は、表2の左上から右下にかけて弱まっていくと考えられる。表1の与那国語に関して、ngaに脱主題化の機能があると考えられることで正確にその分布を説明できる。脱主題化仮説は、様々な方言の主格標示の説明原理としても有効である可能性が指摘されている(佐々木印刷中)。

格標示の動機がAとPの識別にあって、Sの格標示の動機はないとする相互識別仮説と異なり、脱主題化仮説は主題ではない環境に置かれた主語に格標示の動機が存在することを予測し、したがって有標主格(A/Sが主格標示、Pが無標)の存立を予測する。それだけでなく、上で見たように、日琉諸語に見られる有標主格の普遍特徴(名詞句階層上位・動作主性階層上位の主語に対して成り立ちやすい点)を、納得のいく形で説明できる。

上記の脱主題化仮説を、有力な仮説の1つとして、本研究で検証し、これを出発点として、様々な修正を加えていくことで、日琉諸語の有標主格の存立基盤を探る予定である。

1.3. 何をどこまで明らかにするか

本研究では、1.1節の(3)~(5)で挙げた問い(以下に再掲)に対し、それぞれ研究期間内に達成すべきゴール(以下で矢印の先)を設定する。

(3) 日琉諸語において、有標主格及はどこからどこまで分布しているのか?

琉球諸語については、申請者が、これまでの個別方言の記述の成果に基づき、奄美語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の記述データを整理する。本土方言につい

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

では、東北(青森方言, 福島方言), 関東(埼玉方言, 東京方言), 中部(愛知方言), 北陸(富山方言), 近畿方言(大阪方言), 中国方言(広島方言, 出雲方言), 四国方言(愛媛方言), 九州方言(福岡方言, 長崎方言, 宮崎方言, 鹿児島方言)の記述データを収集する。冒頭の(概要)で述べたように, 琉球諸語のような有標主格と, 本土方言のような, 相対的な意味で対格標示が生じにくい有標主格をどう類型化していくかについて明確化する予定である。

- (4) 有標主格の共時的存立基盤は何か?(すなわち, どのような意味機能があるのか?)

まず1.2節で見た情報構造の観点から, 主格の機能を再検討していく。

- (5) 言語類型論で明らかになっている他言語の有標主格との共通点・相違点は?

有標主格が見つかる地域(アフリカ, 北米西海岸, パプアニューギニア)のそれぞれの記述文法及び関連文献をまとめ, それらと対照する形で, 日琉諸語の有標主格の特徴を明らかにしていく。例えば, すでに述べたように, 日琉諸語の有標主格は代名詞・動作主にまず見られるという特徴があるが, このような特徴は他の言語には取り立てて指摘されていない(Handschuh 2014を参照)。

ここまでの引用文献

Aso, Reiko. 2015. Hateruma Yaeyama grammar. In Patrick Heinrich, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.), *The handbook of the Ryukyuan languages*, 423-448, Mouton de Gruyter.

Comrie, Bernard. 1994. Was Proto-Indo-European ergative? *Bulletin of the Language Institute of Gakushuin University* 17: 1-14.

Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Greenberg, Joseph H. 1963. Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In Joseph H. Greenberg (ed.), *Universals of human language*, 58-90. Cambridge, MA: MIT Press.

Handschuh, Corinna. 2014. *A typology of marked-S languages*. Berlin: Language Science Press.

König, Christa. 2006. Marked nominative in Africa. *Studies in Language* 30(4): 705-782.

坂井美日. 2013. 「現代熊本市方言の主語表示」『阪大社会言語学ノート』11.

佐々木冠. 2008. 「主語の格形式が二つあること」『言語』37(6): 80-87.

佐々木冠. 近刊. 「下地・坂井・竹内松丸論文へのコメント」竹内史郎・下地理則(編)『日本語の分裂自動詞性』東京: くろしお出版.

下地理則. 2015. 「琉球諸方言の有標主格と分裂自動詞性」『方言の研究』1: 85-113.

下地理則. 近刊. 「現代日本共通語(口語)における分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則(編)『日本語の分裂自動詞性』東京: くろしお出版.

Shimoji, Michinori. 2018a. Dialects. In Hasegawa, Yoko, ed., *Cambridge Handbook of Japanese Language and Linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.

Shimoji, Michinori. 2018b. Ryukyuan Languages from a Typological Perspective: with a Special Focus on Marked Nominativity. Paper read at Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization, Aug. 6, 2018. Tokyo: NINJAL.

2 本研究の着想に至った経緯など

本欄には、(1)本研究の着想に至った経緯と準備状況、(2)関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ、について1頁以内で記述すること。

2.1. 本研究の着想に至った経緯および準備状況

本研究は、申請者が2015年に取得した競争的資金「東京外国語大学AA研の共同利用・共同研究課題：通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」(～2017年度)を発展させたものである。この研究の主眼は、琉球諸語における有標主格の存立基盤と通時的発達プロセスの解明にあった。南北琉球諸語を網羅したこの共同研究によって、有標主格パターンに関する記述データが十分に把握でき、通言語的な有標主格に関する研究動向も整理され、琉球諸語の有標主格の類型的特異性がどこにあるのかがわかってきた。したがって、本研究では、琉球諸語に関しての成果が得られており、その意味で、本研究の堅牢な土台が出来上がっている。この土台に本土方言の有標主格の研究を加えることで、4年の期間で十分な成果が得られると予測される。

本土方言における有標主格に関して、その基礎的な調査はすでに終えている。申請者は、2018年に出版された*Cambridge Handbook of Japanese Linguistics* (Yoko Hasegawa, ed.)における日琉諸語の格配列に関するチャプターを担当したが(Shimoji 2018a)、この執筆過程で、主格標示がほぼ義務的である一方で対格標示が非常に限定的であるという、有標主格に類するパターンを持った方言が西日本方言に広く分布するということを発見した。従って、本研究で、どのような地域の方言に有標主格が見られるかについては申請者がすでに大まかに把握しており、これが、研究分担者と協力者の選定の根拠となっている。なお、本研究には東日本方言を専門とする研究者も参加する。東日本方言には、逆にPを有標にしてA/Sを無標にする(通言語的によくある)有標対格が見られ、そのデータと西日本方言のデータを対照することで、有標主格の特徴がより明確になる可能性がある。例えば、東日本方言のPの有標標示は有生性が効いていることがすでによく知られるが、これと同じように、西日本のA/Sの有標標示も有生性に影響を受けている可能性はないか、探ることが考えられる。

このように、本研究は琉球諸語の有標主格の共同研究の成果を土台に、本土方言についても確実な見通しのもと、日琉諸語の有標主格の総合的な研究という、これまで誰も行ったことがない新規課題に挑むことができる。

2.2. 関連する国内外の研究と本研究の位置付け

1.2節[2]で述べた通り、本研究は格ととりたて(情報構造)の関連を重視して、有標主格の基盤を探っていく。この意味で、本研究は、方言の格に関する最近の研究動向の最前線に立っていると見て良い。今、方言研究における格の研究の流れは、情報構造も積極的に視野に入れる方向に向かいつつある。例えば、国立国語研究所の消滅危機方言プロジェクト(代表:木部暢子教授)では、2016年に「格ととりたて」という、格と情報構造をフォーカスした大規模なシンポジウムが行われ、その成果は木部ほか(編)として出版予定である。

本研究は、海外における有標主格の類型論に相当なインパクトを与えることが予期される。すでに述べた通り、現時点で最も包括的な有標主格の類型論を示しているHandsuh(2014)には日琉諸語のデータが全くなく、理論的にも相互識別仮説に立脚した説明が中心である。本研究の成果を広く英語で公開していくことで、この諸前提を覆し、有標主格が十分に動機付けられた、従って地理と系統を超えて見られる可能性を指摘できる可能性がある。